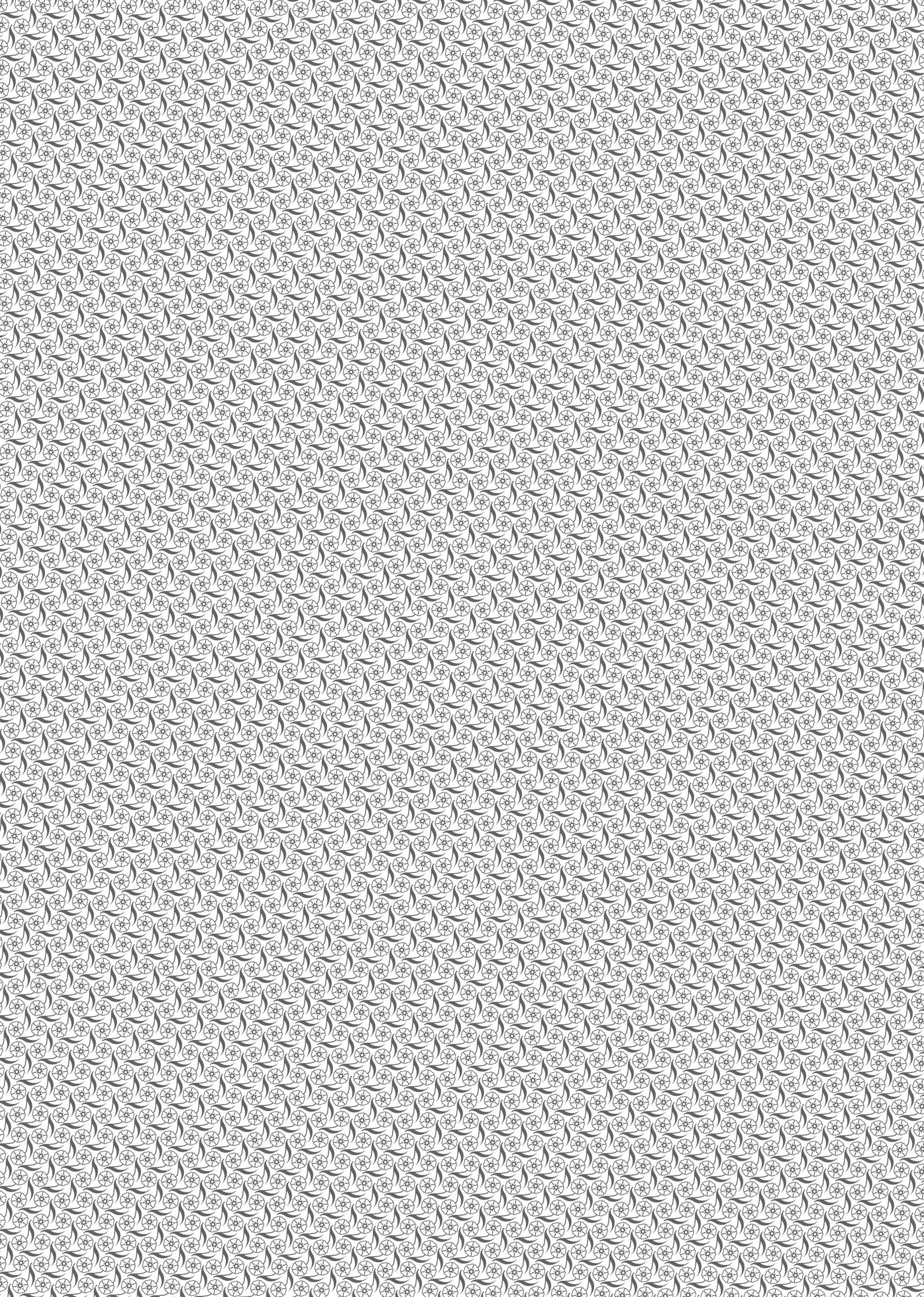


国 語

注 意

- 1 問題は 1 から 4 までで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 他人の成功を羨む。
- (2) 和歌を吟詠する。
- (3) 自然の力に畏怖の念を抱く。
- (4) 虫歯の隙間に薬剤を充填する。
- (5) 会議のジヨマクから議論の応酬になる。
- (6) 銀のコウミヤクを掘り当てる。
- (7) 福祉関係の法律をセイビする。
- (8) 駅までの距離を自分の足でホソクする。

2

次の文章は、小説家の幸田文が父幸田露伴との、大正時代から昭和時代にかけての思い出を記したものである。これを読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

十年の余もまえのこと、私はまだ小学生だった娘を連れて植木市を見
 あるいていた。市はひろいお寺の境内に催されて、相当数の花の木、葉
 の木があつまつてい、昼すぎの陽は軟かかった。にもかかわらず、ど
 うしたことか客の影はちりほりだし、植木屋もまたどこへ行ったも
 のやら、ひっそりしていた。大勢のひやかし客や名所のおみやげ売りの
 ような植木屋たちを予想して来た私には、意外な寂しさだったが、結句
 このほうがのんきではあり、子供と二人ぶらぶらと行った。懐に五円
 あった。いっさい干渉をせず、子供の望むにまかせて何か買ってやれと
 いうことで、父から貰って来ていたのである。子供は連翹も椿もほし
 がらずに素通りする。チューリップや美女桜も見すてて行く。私は誘う
 ようなことはいわなかった。とうとう市のはずれへ出そうになって、そ
 こに藤の花が匂っていた。みごとな紫だった。高さはわずかに人のたけ
 を越すほどだったが、根を見れば古さがわかる。鉢じたてである。枝は
 どこがどう巻いているのか、とにもかくにもその花の長さ、房の多さ。
 虻が寄っていた。

子供はそれが気に入って正直に、これがいいといったが、私は財布と
 花をすぐに比較する世故に慣れていたから、簡単に五円じゃだめだろう
 と投げていた。深ねだりはしなかったが、子供は心ひかれているらしく、
 木のまわりをまわって見たり、花ぶさに顔をつけて匂いを嗅いでみたり

していた。ひよこつと年老いた植木屋が、代金はお届けしたときでいいからと勧める。木も値段もこの市のお職だといった。むろん笑って過ぎ去ったのだが、子供はいったん場外へ出てから思いかえし、山椒を買ってくれといった。なぜそんな変なものがほしいのかと訊いたら、あれっという顔で、このあいだおつゆのなかへ入れるのがなくて困っていたじゃないのと返辞をした。私は三十五銭払って、とげとげの木を持ち帰った。

(1) 話し終つて子供が起つて行つてしまつてから、私は父に、褒めてやつたかと訊かれて、はつとした。いいものを扱んだときになぜ褒めてやらない、親の心が貧しかったといわれた。

この話からまた二十年もさかのほつて、私は女学生の若盛りだった。住いの隣にはひろい庭園があった。静かなので、ものを書くために父は数年間そこを借りていた。樹木も多く、かなり大きい池もあっていい庭だったが、荒れ放題で年々に窶れて行つた。池の兩岸二か所に照応したかたちで藤の棚があった。どちらの棚は朽ち折れて、なかば水びたりのまま藤は危くかかつて咲き、下には鮒が群れていた。ちゃんとした棚に修繕したら、もっと見ばえがするだろうにと惜む心から、私は父に訴えた。

「そう思うかい。」と、否定を含んだ返辞が来た。(2) それだけで父は向う岸の藤を見ていた。同じように水へのめっている。見ているうちに風が渡つて花ぶさが揺れた。花ぶさはしずかにおちついて、しかも揺れているといった風情だった。「藤と藤棚とは別物だよ。」

はじめて私は藤本来のすがたに気がついたようなものだった。朽ちた棚の裏がわから覗いて、賢たてに棚の修繕などを思っていた愚を悟った。あやうく見ぐるしいのは朽ちた棚であつて藤ではない。頼りなく見える藤そのものは、実はしっかりした蔓を張つて、ゆらりゆらりと風に遊んでいるのである。字を書いて縦の棒を引くとき、それには千年の古藤の力がなくてはとも教えてくれた。ついつつかりいと、藤と藤棚とを不可分にして思いこむあやまちを、しばしば私は犯しそうになる。思いおこす父のすがたにも、好きな嫌いなものいろいろあるけれど、庭園に立つて藤の話をした父は好きである。

(3) あんなに植物も動物も好きだった父なのに、晩年はほとんど何もいなくなつてしまつた。植物よりもさきに動物を飼うのをよした。愛が去つたのではなく、愛が深くなつてかえつてそれから離れたのだった。かれらが不満な状態に置かれてなにかを訴えていればたまらなくあわれだし、また満ち足りて無心にいればそれもそれであわれ深く、一々は自分自身のことのように、ひしひしと胸をうって来るらしく察せられた。まして、かれらのために家人の労を煩わせることは、さらに気もちが傷んだらう。愛のあるところには自然煩いも多かつたらしく、犬はよすといひだした。

*こしかわ 小石川へ越して、そこは借家だった。椎一本、かなめ一本、紫陽花二株の殺風景な庭だった。向嶋にいたときは菊を好んで、*はたけ 圃までを一面の菊にしてしまつた父だのに、移転後はだんだんと菊をよし、薔薇もよした。庭とはいえないこの庭に、植物を入れてかたちを与えようと

はさらにしなかった。

「木も草もいけれど、それより平らな地面がおもしろい。」そういうのを私は、へんなことだなと聴いていた。そこは傾斜へ地盛りをした土地だった。借家の庭のやつつけ仕事であるから、一と鉄下には大工ごみや瓦かけが埋めてあるのだ。水はけは悪く、そのくせちよつと照るとぽかぽかに乾いて干割れる。

父は痩せ土地の介抱を気ながにやった。土膏動くということばが好きなようで、毎年節分になるのを待っている。まだ霜柱にささくれているのを見ながら、そろそろ土の気が動いて来るといつてたのしんだ。何年かして地面はややおちつき、平らにひき締ってきた。

(4)「よくなつて来た。」父はよろこんだ。しかし庭は、人から貰った薔薇二株を加えて相変らず椎一本、かなめ一本の殺風景であった。

「さようさ、まだまだおまえは咲いた花をたのしむことしきや知るまい。」という。咲いた花のまえには薔がある、薔のまえには芽だちから薔までの美しさがある。その美しさを知つてのち、裸に枯れた冬の感興もわかる。冬のみそまりを理解して更にのち、なんにもないただの「土」というものをおもう境涯*が出て来るのだという。聴いていて変な気がした。何がいちばん美しく、何がいちばん老成で、何がいちばん若いのだろう。「土」のようにうけとれる。年をとつた父は事物の生じる以前の「土」へ愛をもつ、まだ若いはずの私は生成の結果である花や実を愛す、いたいこれは父の心のほうが若いのだろうか、私のほうだろうか。(5) なんとない日常の些事やことばが、なかなかしつかりした釘になつてのこるものだ。

(幸田文「花三題」による)

〔注〕

結句——結局。

連翹——モクセイ科の落葉低木。

世故——世間の俗事や習慣。

お職——同類の中で最高のもの。

賢だて——利口ぶること。

小石川——現在の文京区にある地名。

向嶋——現在の墨田区にある地名。

圃——畑。

土膏動く——春に地面が太陽光を浴び、ツヤが出てくること。

境涯——ここでは、心境の意味。

〔問1〕⁽¹⁾ 話し終^{おわ}って子供が起^たって行^いってしま^まってから、私は父に、褒めてやったかと訊かれて、はっとした。とあるが、このときの私の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 子供が家の食事のことを考えて山椒の木を望んだのに、その思いを考えを巡らすこともなく、買い物を終えてしまったことを情けなく思っている。

イ 子供に対してあまり関心がないと思っていた父から、なぜ褒めてやらないのかと強く言われ、父に対する自分の認識が違っていたことに驚いている。

ウ 金銭的な都合から藤の花に難色を示したところ、子供はそれを素直に受け入れたのに、子供のその態度を褒めなかった自分を恥ずかしく思っている。

エ 子供が市で一番高価な藤の花を望んだときに、値段のことしか考えず、その優れた観察眼に意識を向けていなかったことに気付き後悔している。

〔問2〕⁽²⁾ それだけで父は向^{むか}う岸の藤を見ていた。とあるが、この表現から読み取れる「父」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 藤の見ばえを気にした娘に対して、藤と藤棚は比べるものではなく、互いに必要な存在であることを確認させようとしている様子。

イ 荒れた藤棚は危険であると心配する娘の言葉を受け入れて、藤棚の状態を確認して修繕する必要があるか見極めようとする様子。

ウ 朽ち折れた藤棚の修繕を訴えた娘に対し、藤棚ではなく藤に視線を向けさせ、藤そのものの存在感に気付かせようとしている様子。

エ 庭の手入れを希望する娘に対して、これ以上藤や藤棚について話しても、娘には自分の考えを理解してもらえないとあきらめている様子。

〔問3〕⁽³⁾ あんなに植物も動物も好きだった父なのに、晩年はほとんど

何もいわなくなってしまった。植物よりもさきに動物を飼うのをよした。とあるが、父が「動物を飼うのをよした」わけを「私」はどのように思っているか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 好きな動物の世話を続けることは家族に迷惑をかけてしまうことになり、今までどおりの愛着が持ちづらくなったから、と思っている。

イ 年をとるにつれて動物に一層のいとおしさを感じるようになり、かえって一緒に過ごすことにいたたまれなくなったから、と思っている。

ウ 長年飼い続けてきた動物が身近になりすぎて、いつの間にか動物への関心が薄れていくことに耐えられなくなったから、と思っている。

エ 老いて衰えていく動物の姿がまるで自分の姿を見るようでつらくなり、新しく飼うことをためらうようになったから、と思っている。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「よくなって来た。」父はよろこんだ。という表現から読み取

れる父の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 植物を植えるためではないが、何年も手入れをしようやく命を吹き込まれたような状態になった「土」に手応えを感じる様子。

イ 他の植物を植えずにこまめな手入れを行った結果、なんとか新たな植物を植えられる状態にまで成長した「土」に満足している様子。

ウ 誰にも手入れをさせず、何年も介抱した庭を我が子のように感じ、今後は娘と共に「土」を育てようと意気込んでいる様子。

エ 楽しみながら痩せた土地の世話をしたことを通じて、関心の対象が花に加えて「土」にも広がったことに喜んでる様子。

〔問5〕⁽⁵⁾ なんとない日常の些事さざじやことばが、なかなかしつかりした釘くぎになつてのこるものだ。とあるが、このときの私の気持ちとして

最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 暮らしの中での何気ない父のことは自分を批判しているかのように感じられ、今も苦い思い出として残っている。

イ 過去の父の言動や考え方に全て共感しているわけではないが、現在の自分の土台となつていることに感謝している。

ウ 何気ない日々の生活の中で父との感覚の違いを味わった経験が、思ひのほか現在でも自分の胸に強く残っている。

エ 父の思い出を振り返ると植物に関する知識の奥深さに改めて驚かさず、今後父のようになりたいと思つている。

〔問6〕 本文の表現の特徴について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 父の考え方を父自身に語らせることで、家族や動植物を優しく見守る心情が詳細に描写されている。

イ 花や土にまつわる父との折々の思い出が、会話を交えながら私の視点を通して簡潔にまとめられている。

ウ 倒置法や体言止めなどの表現技法を多用して登場人物への感情移入をしやすくし、話に引き込むよう工夫されている。

エ 父の日常の姿が私や娘の視点から多面的に描き出され、父のイメージが想起しやすくなっている。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

一般に経験を言語化する、というとき一つの基本的誤解がある。それは、まず言語化されていない生のままの経験があつて、それを言葉で「表現」するのが言語化だという誤解である。だから、言葉はつけたしで言葉になる前にこそ純粹な経験があるのだ、と思われ勝ちなのである。

しかしそうではない。言葉以前の経験、この場合は言葉以前の思考なるものがあるとしてもそれは全く無定形な経験、無形の思考でしかないだろう。なぜならばそのような経験や思考は一切のかくかくしじかきを言うことが不可能なものだからである。

① そんなことはない、例えば、何について考えていたのかと問われれば（自問でもいい）かくかくだと答えられるのだ、と言われるかもしれない。その通りである。だがかくかくだと答える時にその経験なり思考なりはその答えるという形で（また答の範囲で）言語化された経験や思考になったのである。そのように答えることは、裸の思考を（部分的に）言語化することではない。その思考がその範囲で言語化された思考になることなのである。言語化以前の裸の思考なるものは現象されない生フィルムと同様にまだ姿を持たない思考であり、まだ生れない未生の思考なのである。

だが、思考や経験の時点でそれらが実況放送的に言語化されることは稀である。ただ後刻、その思考や経験が憶い出されるときに言語化された思考や経験になるのである。それはおかし、思考や経験が憶い出され

る、というとき、その憶い出される当の思考や経験がある筈ではないか、そしてそれらこそ言語以前の生のものではないか、と言われるよう。この反論はいかにも当然であるがやはり事実誤認の上に立っている。上述の表現以前の経験という誤りと想起を再体験だとする誤りとは同腹の双生児的誤謬である。或る経験や思考を憶い出す、ということはその経験や思考を再体験することではなく、それらを言語的に想起することであり、言語的に想起することがまさにそれらが言語的経験や思考になる、ことそのことなのである。

これまで想起というものが全く誤解されてきた。想起とは過去の現在経験の再生または再現であると誤って解されてきたのである。だが食事の想起とは今一度食事の経験をかすかに持つことではないし、夢の想起は更めて軽く今一度夢を見ることではない。しかしこの想起の誤解は根強く我々を支配している。この容易に抜き難い誤った先入見から自由になるためには想起というものを更めて成心なく観察することが必要である。まず想起は知覚と並ぶ経験の根本様式であつて知覚の二番煎じなどではないことに気付くだろう。知覚が現在を経験する経験であるのに対して想起は過去を経験する様式である。古物になった現在経験の再経験ではなくして過去それ自体を直接に経験するのが想起である。何かを見たり聞いたりするのはなく、何かを見た、何かが聞えたという過去形の直接的な初体験なのである。一方、知覚には視覚聴覚などの五つの感覚があるのに対して、想起には唯一つ「言語覚」とでもいうべきものがあつて五感を主導する。つまり、想起されるのは、感覚的情景は副次的で根幹は何が見えた、何が聞えたといった、言語的物語りなので

ある。時として想起が難渋する時はこの物語りを努力して制作せねばならない。例えば夢の想起などはそういう場合である。

以上でした想起の観察は当然思考経験にも適用される。⁽²⁾ 思考の最中、

つまり思考の現在経験は概して言葉に乏しく黙しがちである。しかし思考の想起経験では思考は言葉に溢れた過去形の物語りになる。これが、思考が言葉になる、ということに他ならない。

昨夜の夢を今日憶い出す。それは今日昨夜の夢を今一度みることでない。今眠ってなどはおらず、目覚めて昨夜の夢を憶い出しているのである。それは、初めああしてそれからこうなった、とその夢を言語的に想起することである。そうしてその夢を言語的に確認し、言語的に確定するのである。

それによって昨夜の夢は言語的になる^⑤のであり、その夢を見たということが確定するのである。実際、「今夢を見ている」という現在形は余程変った珍しい場合の他は意味がない。通常の場合に意味があるのは「昨晚夢を見た」という過去形なのである。そしてそれは言語的にかくかくしかじかの夢を今憶い出しているということに他ならない。もし一切のかくかくを憶い出せないような場合には昨晚夢を見たということそのことが確認されないのである。それと同様に、言語化以前の思考、一切のかくかくを憶い出せないような思考は、私は思考したということそのと自身が確定しない、そのような思考であるといわねばならない。確かにそのような思考を私がしたかもしれない。しかし、何ともしれない、ああでもなく、こうでもないといった風な思考、いやそんな思考があったともなかったとも言えないような思考、ただ何となしに何かであった

ような思考、そのような思考をなおも思考と呼び続ける必要はもうないだろう。少なくとも本講ではこれ以後言語化された思考だけを扱うことにする。

以上で述べた誤解を繰返して言えば、まず先に言語化を一切受けていない純生の経験というものがあり、その経験を言語で表現するのが言語化だという、私が「表現の誤り」と呼びたい誤解である。この表現の誤りは決して経験の言語化に当つてのみ生じる孤立した誤解ではなく非常に広い範囲のあちこちに現れる様々な誤解のいわば基本型ともいえるべきものである。特に、この表現の誤りに接して上述の想起の誤りが続く。

その表現の誤りの最初がいわゆる言語芸術に見られるのは当然であろう。詩や歌を作るとき、初めに詩想とか歌想とかという非言語的な「表現したい」思いがありそれを次に言語で「表現する」のが作詩、作歌である。これは詩人や歌人自身がそう思っている形跡がある誤解である。

同様に、画家や作曲家はこれまた非言語的な画想や楽想をまず心に抱き、それをキャンバスの上に絵具で、あるいは五線譜の上に音符で「表現する」のだという誤解がある。

また、「言葉では言えない、言葉では言い表せない、感動とか思い」こうした言い方はどこにでも見られる。「表現の誤り」はこのように広い範囲でわれわれを呪縛しているのである。この誤りに対する私の論駁^{*きびゅうはう}は帰謬法的である。

仮に表現の誤りのいう所が正しく、表現以前の^⑥非言語的経験Eが言語で表現されてSという叙述になったものとしよう。このときSはEを正しく表現しているかいないかが言えなければならないだろう。とにかく

く、SとEとは比較可能でなくてはならない。しかし、全く非言語的な経験Eと叙述文Sとは一体どうして較べることができるのか。例えば、一つの知覚風景、今見えている自分の部屋の知覚風景とそれを叙述した文とを較べられようか。今見えている風景の中で第一何を、どの部分に言及すべきなのか。本棚に本が並んで見えているが、それを漠然と「本の列」と描写すべきなのか、五・六冊はその見えている題名を叙述すべきなのか、あるいは一切を無視すべきなのか、つまり正しい叙述は何なのか皆目私にはわからない。言語を一切含まない知覚経験を言語文と比較するなどとは不可能なことである。ましてや微妙な捉え難い気持ちの動きや思いの揺れなどを言語描写と較べるなどは全く不可能である。⁽³⁾だから「表現する」などとは思いつた絵空事にすぎない。

実は、経験の言語化とはその経験の言語的想起なのではないか。これが「表現の誤り」の代りにとりたいたい私の代案である。

(大森莊蔵「思考と論理」(一部改変)による)

〔注〕 誤謬——まちがひ。

論駁——反論する。

帰謬法——誤りだと気付かせる証明法。

〔問1〕⁽¹⁾ そんなことはない、例えば、何について考えていたのかと問

われれば(自問でもいい)かくかくだと答えられるのだ、と言われるかもしれない。とあるが、「そんなことはない」の「そんなこと」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 言葉以前にこそ純粹な経験があるのであり、言葉は後から付けたものでしかないということ。

イ 言語化されていない生の経験を言葉で表現することが、言語化することだと誤解しているということ。

ウ 言語以前に経験や思考という無形なものがあり、これらを説明することが言語化することだとということ。

エ 言葉以前の経験や思考があったとしてもまだ形のないものであり、説明することができないということ。

〔問2〕 思考の最中、つまり思考の現在経験は概して言葉に乏しく黙

しがちである。とあるが、「思考の現在経験」とはどのようなも

のだと筆者は述べているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 言語的に思考しているので、その場で言語として確認し確定できるもの。

イ 言語という形式にはなっておらず、そのままの姿では思考とはいえないもの。

ウ 現在思考しているのかもはっきりせず、後で過去形でも言葉にできないもの。

エ 現在は覚えていて、後で忘れてしまっても思考によって思い出すことができるもの。

〔問3〕 本文中に出てくる「想起」と「知覚」について、波線部の①か

ら⑥はそれぞれA「想起に関係するもの」、B「知覚に関係するもの」のどちらに当てはまるか。その組み合わせとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

① 無定形な経験

② 現像されない生フィルム

③ 過去形の直接的な初体験

④ 言語的物語り

⑤ 「今夢を見ている」という現在形

⑥ 非言語的経験

ア A ①と④ B ②と③と⑤と⑥

イ A ③と④ B ①と②と⑤と⑥

ウ A ①と②と④ B ③と⑤と⑥

エ A ③と④と⑤ B ①と②と⑥

〔問4〕⁽³⁾ だから「表現する」などとは思いつつた絵空事にすぎない。と

あるが、「『表現する』などとは思いつつた絵空事にすぎない」と
筆者が述べるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 感覚でとらえたものを、完全な形で言語で表現しつくすことはできないから。

イ 言語に関する受け取り側の理解力が、表現する側と同じレベルであるとは限らないから。

ウ 感覚でとらえたものを言語で表現できるようになるには、大変な努力が必要だから。

エ 言語で得られる情報には、視覚や聴覚によって得られる情報が不足しているから。

〔問5〕 この文章の展開を説明したものととして、最も適切なのは、次の

うちではどれか。

ア 最初に想起の誤解や思考経験について説明し、次に経験の言語化の誤解について述べ、最後に表現の誤りの例を示し想起について言及している。

イ 最初に経験の言語化の誤解について説明し、次に表現の誤りの例を示し想起について述べ、最後に想起の誤解や思考経験について言及している。

ウ 最初に想起の誤解や思考経験について説明し、次に表現の誤りの例を示し想起について述べ、最後に経験の言語化の誤解について言及している。

エ 最初に経験の言語化の誤解について説明し、次に想起の誤解や思考経験について述べ、最後に表現の誤りの例を示し想起について言及している。

〔問6〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「言葉の働き」というテ

マで自分の意見を発表することになった。このとき、あなたが話す言葉を具体的な体験や見聞を含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や、や「などもそれぞれ一字と数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

冬は雪

日本の四季、春夏秋冬の季節には、それぞれを代表する美しい風物——風景や動植物があります。全体を花鳥風月といたり、雪月花などと呼びならわしたりしています。季節ごとに、こころに思い浮かべる風物はいろいろでしょう。でも、古くから和歌や俳句によまれてきた代表的な風物となると、しぜんとしぼられてきます。

春だと、なんといっても桜の花。たんに花といえば、桜と定まっています。夏はやや迷いますが、伝統的には時鳥（ほととぎす）ということになるでしょう。夏の到来を告げる鳥として、時鳥がいちばんにきます。秋は月、これには疑問が出るかもしれませんが。月は一年中あるもので、秋に限るのはおかしい、ほかの月だつてうつくしいと。そのとおりです。でも、「中秋の名月」ということばがあるように、陰暦八月十五夜の月が一年でもっともうつくしいとされてきました。もちろん、春・夏・冬、どの季節の月もそれぞれ味わい深い景色にちがいはありません。

冬はやはり雪でしょう。公園の木の葉をかざる雪、校庭をまっ白に染めた雪はいずれもきれいだし、雪化粧した富士山を想像してもいいかもしれません。幼いころの思い出がよみがえるというひともいるでしょう。清少納言（せいしょうなごん）は『枕草子』にこう書いています。

冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず、霜のいと白

きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。

冬の朝早く、雪の降った景色は、いうまでもなくすばらしいとたたえ、霜の白さももちろんすてきだといったあと、ぐっと冷えこむなか、火をおこして炭を運ぶようすも冬にふさわしいといっています。エアコンなどなかった時代、山城盆地（やましろ）の、並大抵でない冬の寒さのなかで、⁽¹⁾こころした美意識をはたらかせているのです。

*年ふれど色も変らぬ松が枝（え）にかかれる雪を花とこそ見れ 不知読人
夜ならば月とぞ見ましわが宿の庭白砂に降れる白雪 紀貫之（きつらぬき）

*後撰和歌集と拾遺和歌集の歌です。松の枝に降った雪を花のようだといい、もし夜の庭に降った雪ならば月のようだろうとよんでいます。千載和歌集の「消ゆるをや都の人はをしむらん今朝山里（けさ）にはらふ白雪（*かむららのきよゆけ）」（藤原清輔）のように、京の人は雪の消えるのを残念がるともうたいました。山里に降った雪を払いのけるなんてもったいないと、ひたすら雪を愛（め）でてやまないのです。

俳句の時代になると、雪見——とくに初雪を見るところにこころを向けるようになります。芭蕉（*ばしゅう）にこんな一句があります。

はつゆきや幸庵（さいわいあん）にまかりある

前書まえがきによると、どこかに出かけていても、なんとか自庵（芭蕉庵）で初雪を見たいものだと思い、雪が降りそうな頃合ころあいに戻っていたところ、ちやうど師走しわす十八日に待ちに待った初雪が降ってきた。そこで、「ああ庵に居合わせて幸運だった」とまるで子どものように大よろこびしています。

かとおもうと、こんな俳句もあります。

いざ行む雪見ゆかにころぶ所まで

語順に気をつけてください。⁽³⁾ さあ行くぞ、といつてから、雪見をするために、とつけ足し、さらにとにかく転んだところまで、と倒置を二度も重ねます。よほどあわてているのでしょう、居ても立っても居られないという、いかにも急せぎ込んだ言い方になっています。この言いつぶりに、舌を巻かないわけにはいきません。今まさに雪が降ってきたのを目にして、まるで気が動転する⁽⁴⁾ばかりの騒ぎようです。心情をストレートによむ、それが芭蕉流の俳諧なのです。和歌をうたうように悠長になんかしてられないという心境が見てとれます。

この芭蕉のさまを見ながら、蕪村ぶそんはこんな俳句をやってみせました。

いざ雪見かたちくり 容みす簑かさと笠

「いざ雪見」の五文字は、芭蕉の「いざ行む雪見に」までをまとめた言い方です。「容す」とは、身づくろいをする、姿かつこうをととのえ

ることです。何をもって？ 簑と笠を身に付けて、だというのです。これも倒置になっています。羽織・袴はかまでは台無し。蓑笠みのかさこそ雪のための正装にうってつけ、もしス、ーツなどまもっては場違いもはなはだしい。この芭蕉の句をみてください。

たふとさや雪ふらぬ日も蓑とかさ

芭蕉自筆の前書に、「みのも貴し、かさもたふとし」とあり、たとえ雪が降っていないことも、降ったときの用意に蓑と笠だけは忘れない心がけとは、なんと尊いことか、といった俳句です。蓑と笠、このふたつは、いつてみれば風雅のシンボルとみなされているのです。蕪村が雪見にあたって、このふた品を持ちだした裏に、芭蕉のこの句があったわけです。蕪村は雪見という行為への風雅心みやびこころのうえに、芭蕉への敬慕を重ねようとしたのです。雪をみるといふ何げない冬のいとなみが、じつは芭蕉と蕪村両者のあいだの対話にもなっているのです。こうなると、ただ「雪」といっても、おろそかにはできませんか。

雪ゆきの一茶

一茶は雪国生まれです。信濃町しなのまちかしわぼら柏原は、信濃の国でもいちばん北部、長野から北国街道をすこし北にゆくと、すぐ越後の国にはいります。越後といえは名だたる雪国です。信州・越後の、とくに黒姫くろひめや妙高みょうこうの山裾は豪雪にみまわれます。一茶の村は、越後の山々を越えたすぐ南の山すそにあつて、毎年のように隣国におとらぬ、並大抵でない雪におそ

われています。一年の半分近くは雪に閉じ込められるといわれます。「信越」という呼称があります。信濃と越後をあわせたいいかたです（越前・越中を含めることもあります）。いずれもたいへんな雪国で、生活や通行に支障をきたすこともしばしばです。そんな国に育ち、生きてきた人びとにとって、雪はどんなふうに映っていたでしょうか。一茶はこんな雪の句をよんでいます。おかしいけれど、親しみのある句です。

むまさうな雪がふうはりふはり哉

うまそうな雪だといひ、飛ぶようすを「ふうわりふわり」と言ってみせる語感にこころひかれます。一茶には擬音語や擬態語（オノマトペ）をしきりに使って、^(a) ややもすれば安易にみえる句づくりの傾向がありますが、この句のばあいはまさにびつたりの言い回しです。

でも、一茶のばあひ、こんな生やさしい雪では終わりません。

はつ雪をいまましいと夕哉

はつ雪を敵のやうにそしる哉

第一句の「夕」は「I」と「夕」の掛詞になっています。初雪に対して、のろわしい、腹立たしいなどという憎しみのことばを投げつけるのです。つぎの句では、きれいや美しいとは正反対、それぞれどこか、まるでかたきだとののしる始末。俳句として品のあることば遣いとはい

えませんが、逆にいうと、それだけせっぱつまった思いがこもっているということ。庵に居合わせて、初雪がみられてさいわいとよろこぶなんて、雪国のひとからは、オメデタイことよと冷笑されるかもしれません。初雪は、これから半年の苦勞のはじまりでしかなく、さらに真冬の雪は、生き死にかかわる重大案件でもあったはずです。

故郷をこころからいつくしんだとはいえない一茶でしたが、「雪」については、北信濃に育った一茶ならではの作品をみることができま。ざっと数えて、五百以上もの「雪」の句をよんでいます。数からだけでも雪にかける思いが察せられますが、和歌ふうのみやびな感覚ではなく、⁽⁵⁾ 葛藤するかのようなよみぶりが目立ちます。

（藤田真一『俳句のきた道 芭蕉・蕪村・一茶』による）

〔注〕 年ふれど——年月を經ても。

紀貫之——平安時代の歌人。

後撰和歌集、拾遺和歌集、千載和歌集——いずれも平安時代に作られた勅撰和歌集。

藤原清輔——平安時代の歌人。

芭蕉——江戸時代前期の俳人。

蕪村——江戸時代中期の俳人。

一茶——江戸時代後期の俳人。

信濃・信州——現在の長野県。

越後——現在の新潟県。

越前——現在の福井県東部。

越中——現在の富山県。

〔問1〕⁽¹⁾ こうした美意識をはたらかせているのです。とあるが、「こう

した美意識をはたらかせている」とはどういうことか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 伝統的な自然の景物よりも、人びとの生きる姿に美しさを見つけ出そうとしている、ということ。

イ 目で見ただけではなく、視覚以外の感覚をとおして美しさを感じとろうとしている、ということ。

ウ 伝統的な美意識に加え、自分の感性に照らして美しいと思うものを見つけ出そうとしている、ということ。

エ 宮中の晴れやかな儀式とは異なる日常生活の中にも、伝統的な美意識を感じとろうとしている、ということ。

〔問2〕⁽²⁾ 夜ならば月とぞ見ましわが宿の庭白砂に降れる白雪 の和歌

はどのような景色をよんだ歌か。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 宿の庭一面に敷きつめた白砂に月光が輝き、まるで雪が降り積もっているように見える景色。

イ 宿の庭一面に敷きつめた白砂が、まるで月光を浴びて降り積もる雪のように見える景色。

ウ 宿の庭一面に雪が降り積もり、まるで白砂が月光に輝いているかのように見える景色。

エ 宿の庭一面に降り積もった雪が月光を浴びて、まるで白砂のように輝いている景色。

〔問3〕⁽³⁾ さあ行くぞ、といつてから、雪見をするために、とつけ足し、

さらにとにかく転んだところまで、と倒置を二度も重ねます。とあるが、ここから芭蕉のどのような気持ちが読み取れると筆者は考えているか。その説明として最も適当な一文を四〇字以内で抜き出し、最初の五字を書け。

〔問4〕⁽⁴⁾ ばかり とあるが、この「ばかり」と同じ意味・用法で使わ

れている「ばかり」を、次の各文の――を付けた「ばかり」のうちから選べ。

ア 本物と見違えるばかりの出来映えだ。

イ 遊んではばかりの子ども時代だった。

ウ ひと月ばかり前の出来事だった。

エ あとは結果を待つばかりだ。

〔問5〕^(a)「ややもすれば」、^(b)「冷笑される」とあるが、本文中で述べら

れている「ややもすれば」、「冷笑される」の意味に最も近いのは次のうちどれか。それぞれ選べ。

^(a)「ややもすれば」

ア どうかすると

イ むやみやたらに

ウ 一見すると

エ いくらかは

^(b)「冷笑される」

ア あきれて無視される

イ 笑いながら皮肉を言われる

ウ 冷たくあしらわれる

エ 見くだして笑われる

〔問6〕空欄 I に入れるのに最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 結う

イ 憂

ウ 言う

エ 融

〔問7〕⁽⁵⁾葛藤するかのようなよみぶりが目立ちます。とあるが、筆者

は一茶の作品に見られる「葛藤するかのようなよみぶり」をどのようなものだと思っているか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 心の中では故郷をなつかしく思う気持ちが強いの、それを素直に表さないようなよみぶり。

イ 初雪に始まる長い雪との闘いへの憂鬱な思いが、言葉の端々ににじみ出ているようなよみぶり。

ウ 汚れを知らない真っ白で美しい雪が、現実には故郷の人々を苦しめることに戸惑うようなよみぶり。

エ 雪に対する親しみと憎しみという二つの感情の間で、揺れ動いているようなよみぶり。